いわゆる過疎地域の家族関係（2）

―― 序報（その2）――

続　有恒　久世敏雄　水山進吾[*1)]
松田　惺[*2)]　織田揮準[*3)]　永田忠夫[*4)]
植村勝彦　蔭山英順[*5)]　鈴木真雄[*6)]

「紀要」17巻では，原稿の〆切までに序報の原稿が間に合わず，この年（1970年）に実施した調査地域の全部の全体的印象を記述することができなかった。ここでは，残りの2つの町村について述べる。

また，本年（1971年）には，熊本県球磨郡水上村を前年同様に調査し，また，長野県上村へは，学部学生の研究実習をかね，前年建設中であった下栗地区への自動車道完成の影響を見る目的で，再度訪れ，前年度に面接した家庭を一部に含みつつ，さらにケースを増加させた。ここでは，熊本県水上村についても全体的印象を述べることとしたい。

3．愛知県北設楽郡富山村

(1) **調査期間**――1970年10月9日～12日

(2) **調査参加者**――続有恒，久世敏雄，水山進吾，松田惺，織田揮準，永田忠夫，植村勝彦，鈴木真雄

(3) **面接ケース**――21

(4) **人口の推移**――1930年（昭和5年）以来の国勢調査人口の推移は表1の通りである。

表1　富山村の人口推移

年　度	人口総数	男	女	前年度比
1930	1,015	496	519	—
1935	937	482	455	− 7.7%
1940	871	—	—	− 7.0
1945	1,036	—	—	+18.9
1950	1,067	554	513	+ 3.0
1955	978	643	335	− 8.3
1960	654	368	286	−33.1
1965	520	279	241	−20.5
1970	349	171	178	−32.9

この表で明らかなように，1960年以降の人口減は極端であり，1970年には戸数94戸になっている。戦中，戦後の人口増（1945年，1950年）は，疎開，復員等によるものであるが，1950年から1960年の間に，人口がほぼ半減しているのは，1955年佐久間ダムの建設によって，70戸以上の水没家庭を出し，このほとんどが離村したことによるものである。1960年から以後の10年間にも，人口はさらに半減に近い減少を示しているが，これはいわゆる「過疎化」によるものであって，その激しさは，愛知県内では随一である。このようにして，愛知県内での人口集中地域では1㎢当り1万人近い人口密度を示すのに対し，この村は僅かに1㎢当り10人という過疎地になっている。[*] 人口，世帯数に関しては，島嶼部を除いて，全国最小の村である。

(5) **村勢一般**――富山村は，愛知県が長野県および静岡県と接する東北部の隅に当り，天竜川（佐久間湖）を境として静岡県水窪町に接しており，八岳山（1,140m）を境として，長野県天竜村に接している。県内では，隣村の豊根村が他町村と富山村との間を割いた形になっているが，この豊根村の中心部へすら，直接に車の通ずる道はない。1,000m内外の山稜によって，隔てられているのである。

村の総面積は34.71㎢であるが，このうち92.7%は山林であり，畑が20ha，田は僅かに30aしかない。ダム建設による水没以前には，天竜川にそそぐ漆島川の合流点附近（河内部落）が村の中心であり，そこには，なお若干の田があったようである。

村は，現在，漆島，横林，市原の3地区に大別されるが，市原地区には，役場，学校，郵便局等があり，ここに大半の世帯が居住している。漆島地区は，漆島川を溯った奥にあり，霧石峠を経て豊根村山内部落へ通ずる歩道に沿っているが，古くはこの道が隣村との往来の主要道であったようである。この地区を除いては，ほとんどすべての家屋が，天竜川（佐久間湖）沿いに，ダム建設

＊1）名古屋市立保育短期大学
＊2）名城大学教職課程部（旧姓，荻野）
＊3）名古屋市立女子短期大学
＊4）愛知県立看護短期大学
＊5）大学院博士課程学生
＊6）大学院研究生

＊　1965年には人口密度15人であったが，これは愛知県92市町村の中で最下位である。

に伴ってできた県道に沿ってならんでいる。

村への交通は，国鉄飯田線大嵐（おおぞれ）駅から，天竜川をまたぐ吊橋（鷹巣橋）を渡る以外には，バス路線もなく，道路も，佐久間ダムを渡り，佐久間湖沿いに豊根村地内を経て村内を通り，さらに天竜村へ抜ける県道以外にはない。したがって，この村に直接関係の深い北設楽の地方事務所のある東栄町へは，鉄道によっても，自動車を走らせても，一度静岡県内を通らなければ行けないのである。県庁所在地である名古屋市へは，豊川から東名高速道路を利用して約150 km，4時間以上を要し，鉄道を利用しても，約215 km，豊橋まで2時間30分，名古屋までは少くとも3時間30分を要するのである。

1965年の農林業センサスによれば，農家戸数は全戸数90のうち54戸であり（専業ナシ，1種兼業11戸），1戸当りの耕地面積は26 a である。同年の国勢調査によれば，15才以上の就業者数257人のうち，農業43人，林業81人，建設業56人，製造業16人，小売業27人などが主な職業である。

農家のうち10数戸は養蚕をしているが，年間の収繭量は2,700 kg 程度であり，農業としては成り立たない。この村には，農業協同組合はないのである。主要産業は林業ということになるが，林産物について1965年から1969年までの5年間の推移を見ると，椎茸が2,200 kg（1960年）から3,700 kg（1969年）に増加しているほかは，木材は5,900 m³から3,000 m³へ，木炭は1,400俵から200俵へといずれも減少が著しい。また，農協に替るものとして，森林組合があるが，この組合員240人のうち，村内居住の組合員は86人（36.7%）にすぎず，このうち50 ha 以上の山林所有者15人のうち，村内居住者は3人しかないのであって，この組合の運営は，むしろ村外居住者に支配されているといえよう。

村の財政規模は，1969年度で6,195万円であるが，歳入における国庫支出金や交付金，交付税は合計1,067万円（17.2%），県の支出金729万円（1.2%）であるのに対し，地方税は2,831万円（45.7%）もあって，「過疎対策法」の適用対象にならない。この地方税の内訳は，村民税約36万円，タバコ消費税55万円，木材取引税約99万円のほかは，固定資産税であり，これが2,628万円(92.8%）になっている。この固定資産税の大半がダム関係のものであって，「電力開発」から支払われるのである。歳入の43.4%に当る固定資産税（大半がダム関係の収入）に財政が依存しているというところに，この村の大きな特殊性があるといわなければならない。

教育・文化関係では，1970年5月現在で，小学校（3学級）と中学校（3学級）とが同一の建物に同居しており，児童数28名，生徒数28名である。同居しているといっても，小学校教員6名と中学校教員7名とは，教員室こそ共用の1室であるが，別々に校長を頂き，決して併設校ではないのである。

1970年3月の中学卒業生は10名で，高校へ進学した者6名，就職した者3名であった。進学先は大多数が静岡県立佐久間高校であって，ここへは飯田線を利用しての通学が可能である。1970年7月末現在の，村民の年令別人口構成は，表2のようであるが，中学卒業以後の10台の人口が比較的多いのは，高校への通学の可能なことによるものであると考えられる。1955年当時15〜19才であった人たち（現在30〜34才）から，1965年当時にその年令であった人たち（現在20〜24才）までの層が著しく少ないことと合せ考える必要がある。

表2　年令別人口構成

年令区分	男	女	計
90才以上	1	1	2
80才〜89	5	5	10
70 〜 79	6	9	15
60 〜 69	24	16	40
50 〜 59	22	22	44
40 〜 49	27	36	63
35 〜 39	13	14	27
30 〜 34	4	7	11
25 〜 29	10	6	16
20 〜 24	8	10	18
15 〜 19	17	21	38
10 〜 14	13	19	32
5 〜 9	12	13	25
0 〜 4	10	9	19

婦人会が70名の会員を有するのに対し，青年会の会員は8名にすぎない（1970年5月現在）。高校卒業後には，ほとんどすべての者が村を離れていくことを示しているといえよう。

新聞の購読率65.9%に対し，テレビの普及率は97.8%である。また，簡易水道は，96.4%の家に導入されている。電話加入者は，単独加入が21，共同加入が23で，必しも高い率だとはいえず，また，原付自転車以上の自動車両は合計43台で，これもまた多いとはいえない。

職員2名を有する「へき地保育所」があり，15名の幼児を保育している。医療については，へき地出張診療所が1ヶ所あるが，最近まで東栄町にある親元病院から週3回の出張診療が行なわれていたのが，医師，看護婦の

不足のために，週2回に減らされている。

保安関係としては，巡査派出所（1名）があり，消防団員は45名，自動車1，動力ポンプ2，手動ポンプ5である。

以上のような寒村であるが，中心になる産業のないことが最も重要な点である。1966年の村民所得推計によれば，村民1人当りの個人所得は24万円，就業者1人当りの生産所得は41万円となっており，極めて低いのである。

(6) **全体的印象**——飯田線大嵐駅は，静岡県水窪町の駅を出ると間もなく入る長いトンネルの出口と，次のトンネルの入口との間に割り込んだ形である。この駅は静岡県内にあるとはいいながら，直接には，富山村のための駅である。村の中心部まで，駅から歩いて15～6分である。しかし，この駅には急行列車は停車しない。上りも下りも1日にそれぞれ9本の列車が発着するだけである。

富山村の住民が350人を割った現在，それでもこの駅はゼイタクかも知れない。佐久間高校に通学する生徒たちのほかは，この駅をきまって利用する人数は極めて少ない。われわれが耳にした範囲では，村の郵便局に勤めている水窪町の人が1人だけである。村の山林労務者として，また，県道その他の道路工事の労務者として，水窪町あたりから通って来る人も，準定時的にはあるようであるが，それは仕事がある時だけの話である。村から他所へ通勤しているという人の話は耳に入らなかった。

しかし，この鉄道が，それだけのことにしか役立っていないとはいえない。日常の買物は別として，一寸した買物となると，村の主婦たちは水窪町まで出かけるのである。また，週2回の出張診療で事の足りない病人は，東栄町の親元病院へ行くのに，この鉄道で三河大野まで行かなければならない。さらに，歯医者は天竜村平岡に腕のいい人がいるというので，下り列車に乗る人もあるのである。

鉄道を使わないならば，佐久間湖沿いの県道を走る他はない。未舗装ではあるが，村からダムサイトまでの30km余りは，かなり整備された道ではある。また，逆方向の天竜村へ向っての鷹巣橋から先の川沿いの道も同様である。しかし，むしろ，佐久間ダムから先や，天竜村から先が問題なので，決して楽々と走れるほどの便利さがあるとはいえない。東栄町に自宅のある中学校長も，通勤はできず，土帰月来のようである。

とにかく，教育にせよ，医療にせよ，あるいは買物にせよ，人手をたのむにせよ，県内の隣村や郡内の中心地と直接に交流・依存することができず，隣接町村であるとはいえ，他県に頼らざるをえないというところに，富山村の大きな特色がある。鉄道がなかったならば，水窪町は山の向うの，交渉のない町になるわけだが，その場合でも，県内隣接の豊根村よりは，天竜川沿いに上る天竜村の方が，自然に往来できる隣りなのである。

古くは，愛知県足助(アスケ)町，稲武町，津具村を経て，豊根村から霧石峠越えに漆島地区へ入る道があり，そのような経路で移住してきたと考えられる先祖を持つ人もおり，また，豊根村との婚姻関係を（中年以上の人々の中に）もつ家もあるが，それよりも多く，天竜村との交渉や通婚（中年以下の人々の中にも）が見られることは，この村の人文地理的位置がむしろ長野県に密接であって，愛知県に編入されているのが自然でないという印象を与えるのである。

旧藩時代は，この村は田原藩（愛知県渥美町）の領地（飛び地？）であったそうで，その関係で渥美半島への移住などもあり，人縁的には豊川，豊橋方面と深い関係をもってはいるものの，県内でのこの村の位置が不安定な感は拭い去ることができない。一例ではあるが，村に入ってくる魚の行商人の一人は村内に居住し，豊橋から仕入れてくるのであるが，他の一人は天竜村平岡からやってくるのである。

この村の第二の特色は，佐久間ダム建設による，村の中心地の水没の影響である。先にも触れたが，ダム建設によって，村役場，学校，郵便局その他がすべて水没した。水没家庭のほとんどは村外に去った。現在この村に居住を続けている人々のほとんどが，したがって水没をまぬがれた人たちなのである。

役場，郵便局，学校は，水没の補償として「電源開発」の手によって鉄筋の建築で新しく建てられた。湖底に沈んだ旧道の代りに，広い新道がつけられ，村内の主要部分は舗装もされた。そして，毎年相当な額の固定資産税が入って来ている。水没をまぬがれた人たちにとっては，一面，事情は好転したわけである。

しかし，深く傷つけられた部分もあるように思われて仕方がない。というのは，1955年当時，佐久間ダムが，戦後第1号の大型ダムとして完成したことは，一つの大きな記念すべき出来事であったわけだが，この建設に伴なう補償問題の解決については，最初の事例でもあったことから，水没関係者たちが一体となって，あるいは，村当局との協力をも確保して，強力に交渉するという体勢がとれなかった。水没者たちは，いわば各個に撃破されたようである。村当局は，直接関係する部分だけのことを処理し，個々の家庭の補償問題には喙を入れなかった（入れられなかった）ようである。その結果，水没家庭

相互においても，非水没家庭との間においても，「うまくやりおった」「狡い」「損をした」「彼奴のせいだ」といったような，認知の喰い違い，見解の相違，意見の対立が生まれた。「村は分裂した」のである。

水没家庭相互が分裂し，水没家庭と非水没家庭との間にも水が入った。少数の例外を除いては，水没家庭は，村に留まろうにも留まれないような心理状状に陥ったのではなかろうかと想像される。不当に安い補償金で，手の打ちようもなく都市へ移住した人もあろうし，相当の額を手に入れて，一仕事やろうと，村内の財産はそのままにして出て行った人もあろう。また，補償騒動に厭きあきして，山林も何も皆人手に渡し，村からきれいに足を洗った人もあろう。もともと千人少々の小村で，半分に近い人がこのような混乱をおこせば，村人の心理的結びつきは決定的に破壊され，姻戚関係もからんで，抜き難い相互不信が残ることは，容易に理解されるところである。われわれが村を訪れた数ヶ月前に，挙家離村した家があった。隣家に面接した際にも，どのような事情なのか，一時的不在なのかどうかさえも知らされていないことがわかった。このような離村の仕方は，その家が部落のなかでも目立つほどの立派な家屋であるから却って異様に感じられ，村内の人間関係に何か普通でないもののあることを想像させるのである。

村長は，長年その職の経験のある人であり，水没当時もたまたま村長の職に在った人物であるが，当時のことについては何も話したくない様子であった。村人たちも，ダム建設当時のことには触れたくないし，触れられたくないといった態度で，話題はそちらへは展開していかなかった。

第三の特徴は，村内の分裂とも関係があるが，村全体としての意欲の無さである。調査当時，人口350人，世帯数90戸程度になっていたこの村が，自治体として十分な機能を果しうるかどうかは，他の事情に問題がなくても，危ぶまれるところである。村長，助役，収入役以下役場の職員14名，村会議員12名，その他に教育委員会をはじめ各種委員会，森林組合，郵便局，学校の職員，地区の世話役などの仕事の分担を考えていくと，小中学校の各学級の委員や諸係と同様の分担にならざるを得ない。現実には，1人の男が議員も委員も，組合の理事もという風にいくつもの役職を兼ねていることになる。教育委員が教育長を兼ね，委員会の事務をほとんど1人で片づけている，ということになる。要するに，人手にゆとりがなく，身動きができない状態のように思われたのであった。

交替して役を引受けるほどの余裕のある人の数を考えると，今やこの村には，新しい交替要員を見出すことができないのではないかとさえ思われるのであった。その上，誰が何をやるにしても，たった90戸を背景にしてでは，何事も余りに困難な仕事であるに違いないと思われるのであった。これを自治機能の喪失というのは不当であるが，村の将来を何とかしようという新しい動きを出にくくしていることは確かだと考えるのである。

村の大部分を占める山林の，その大部分が村民以外の人の所有に帰しているという事情もそれを助長しているであろうが，90戸の村民が何とか一丸となって村の現状を打開しようといった気迫が，どうにも感じとられなかったのである。これが離島のように，物理的にも他から離絶していて，そのために嫌でもまとまらざるを得ないという状況がなく，むしろ，諸事隣接の町村に依存するというこの村では，「われわれで何とか」という気持を持つために，もっと多数の村民が必要なのであって，既に，村としてのまとまりや自発性を生み出す最低人口の限界を割っているのではないかとさえ疑われるのであった。

もし，そうであるとすれば，この村は，もっと適切な規模の町村へ組み込む必要があるかも知れない。しかし，その際，現行の府県の壁を乗り越えた形でしか実現できないと考えられる。このような壁がまた，この村の将来像を描こうとする意欲を殺いでいるのかも知れないのである。大雑把にいえば，一本の県道の山側に，数粁にわたって点在する90戸の「一部落」が，自己所有の土地も僅かで，平地もなく（学校の運動場の長さは約40m），消防のホースの連結訓練には，鷹巣橋を使わざるを得ない，といった状態では，何となく消沈したムードしか感じさせないのも，当然かも知れない。

詳細は不明であるが，その「小部落」は，あちこちから入り込んだ人々の子孫が混在しており，もののいい方まで違うというような話をする人さえいる。天竜川沿いに溯ってきた人，山越えをして東進してきた人などが，寄り集まって出来た村のようである。「昔はよかった」「何かといえば村中が総出でやったものだ」といった類いの話がほとんど出なかったのは，水没事件の残効かも知れないが，何かこの村の特徴を物語っているように思われるのである。

4. 島根県飯石郡頓原町

(1) **調査期間**——1970年10月29日～11月3日

(2) **調査参加者**——続有恒，久世敏雄，松田惺，織田揮準，永田忠夫，植村勝彦，蔭山英順，続仲彦*

* 学部学生

(3) **面接ケース**——42

(4) **人口の推移**——1950年（昭和25年）以来の人口の推移を国勢調査資料によって製表すれば，表3のようである。この表によれば，この町は1955年以降，人口減の傾向が生じ，それが次第に急激になりつつあるといえよう。とくに，最近5ヶ年間には，その直前の5ヶ年間に比べ，世帯数の減少を大きく上廻った人口減が見られる。最近5ケ年間についての移動では，細かな資料はないが，1960年と1965年との年令別人口の推移を見ると表4の通りで，各5才段階ごとの5ヶ年間の増減を見ると，1960年に0才～9才でであった者と，同じく1960年に30才～44才であった者の5年間の減少率は3.1%～5.7%であって，町全体の人口の減少率より低いが，1960年に10才～19才であった者の減少率は25%～40%に及び，これが全体の人口減の中核となっていることは明らかである。1960年当時50才以上であった者と1965年に55才以上になっている者との差は，307名で，しかも，その間の死亡者は283名であるから，高年令層での人口減の大部分は死亡であると考えてよい。そうすれば，この町でも，人口減の中心は，10才から29才までの若い人々が町を出ていくことにあると考えてよいわけである。中国地方の過疎は「挙家離村型」だといわれるが，主流は若年者流出であるといってよい。

表3　　頓原町の人口推移

年　度	人　口	増減率	世帯数	増減率
1950	5,905*	—	—	—
1955	6,617*	+12.1	1,260*	—
1960	6,006	− 9.2	1,243	−1.4
1965	5,396	−10.2	1,154	−7.2
1970	4,145	−23.2	1,071	−7.2

＊印は旧志々村と旧頓原町の合計

表4　　年令別人口の推移

年令段階	1960年	1965年	増減率*
70才以上	329人	326人	—
65～69才	191	217	−15.8%
60 ～ 64	257	230	−13.5
55 ～ 59	266	247	−13.0
50 ～ 54	284	256	− 9.2
45 ～ 49	282	285	− 3.1
40 ～ 44	294	364	− 5.7
35 ～ 39	386	419	− 3.4
30 ～ 34	444	401	−17.0
25 ～ 29	483	316	−14.6
20 ～ 24	370	243	−24.8
15 ～ 19	323	477	−40.9
10 ～ 14	807	694	− 4.8
5 ～ 9	729	529	− 5.7
0 ～ 4	561	392	—

＊1960年の年令段階人口から1965年の人口を引いた率

人口密度も1965年に島根県の人口集中地域が1㎢当り8,292人であるのに対し，43.3人で，島根県内でこれ以下の人口密度の町村は7個しかない。61市町村のなかで8番目に人口密度が低いのである。

(5) **町勢一般**——頓原町は，松江市と広島市を結ぶ国道54号線が町の中心を通っている。島根県を構成している旧出雲国と石見国のうち出雲国に属し，その南西の端に位置するといってよい。出雲市からはほぼ真南に当り，一部は広島県と境を接している。同じ飯石郡の中では，赤来町が最南端であるが，雲南地方（出雲の南という意）の最も南の部分といってよい。

大万木山（1,218m）と草峠（941m）で広島県比婆郡高野町と境し，それから西へ草ノ城山，琴引山（1,014m）を経て，来島ダムに至る辺りで赤来町に接している。ダムの附近から西への丘陵を境にして邑智郡邑智町と，さらにその先三瓶山（1,126m）の中腹に至る部分で大田市と接している。三瓶山から東へ満寿山（659m），野田山（723m），沖ノ郷山（957m）辺りを経て大万木山に至る町の北側では，西から簸川郡佐田村，飯石郡掛合町，同吉田村と隣り合っている。

頓原町は，1957年（昭和32年）2月，町村合併促進法により，旧頓原町と旧志々村とが合併してできた町であるが，この旧町である頓原地区は，54号線を挿んだ町的な地区であるのに対し，旧村である志々地区は，来島ダムから出雲市附近で日本海に注ぐ神戸（カンド）川を挿んだ村的な地区である。

旧藩時代は広瀬藩に属しており，奥飯石212ヶ町村の支配のために，旧頓原村の中央に陣屋が置かれていた。毛利氏と尼子氏との間で激戦が行なわれた土地でもある由で，旧くから，雲南地方の要地の一つであったようである。

交通としては，国道54号線を利用するほかはないが，松江市からは73km（約1時間30分），広島県三次市へは42km（約50分），広島市までは112km（約2時間）であって，国鉄バスのほか，2社のバスが走っている。また54号線から分れて，町内を縦貫して三瓶山に至る約18kmの道路は，1971年3月の植樹祭に，両陛下が出席されるための通路になり，大いに整備され，大田市の中心部までの約40kmは時間的に非常に近くなった。また，神戸川沿

いに出雲市へ出る県道は，整備は不十分であるが，距離は約60㎞で，同市は町民にとっては身近かな都市である。

町の面積は124.6㎢で，その88.6%に当る110.45㎢が山林である。田は6.31㎢（5.1%），畑は1.24㎢（1%）で，他に草地5.33㎢（4.3%）がある。1964年4月現在，農家戸数は約70%に当る748戸で，1戸当りの耕地面積は96aである。主要な産物は水稲で，粗生産額3億5,867万円（1968年度），和牛6,997万円，乳牛1,363万円である。林産物では，パルプ5,500万円，素材3,403万円，木炭2,263万円が主なものである。これからみると，頓原町は，米作中心の農業地帯ということができよう。以上の主産物のほか，養蚕，ワサビ栽培，椎茸の共同栽培にも力を入れている。

町の財政規模は1968年度の一般会計で総額2億3,166万円であるが，このうち町税は1,879万円（8.1%）に過ぎず，交付税，国庫支出金等が1億4,885万円（64.3%），県の支出金2,790万円（12.1%）であって，自主財源が極めて乏しい。町税のうち町民税は約25%，固定資産税が45%，タバコ消費税が約17%である。

教育面では，旧頓原と旧志々にそれぞれ小学校1，中学校1があるが，頓原小学校には都加賀，長谷の2分校（それぞれ4年生まで），志々小学校には角井分校（6年生まで）がある。1970年4月には，頓原小学校は9学級260名，志々小学校は6学級155名で，都加賀分校は19名，長谷分校は9名，角井分校は40名であるが，児童数は年々減少しつつあり，1975年には，頓原小学校は6学級165名に，都加賀分校は6名に，長谷分校は1971年度には廃止になり，志々小学校は6学級93名に，角井分校は19名になる予定である。中学校も同様で，1970年4月には頓原中学校は6学級182名，志々中学校は4学級125名であるが，1975年には，頓原中学校は5学級138名，志々中学校は3学級97名に，1980年には，頓原中学校は3学級71名に，志々中学校は3学級47名にまで減少する予定である。

中学卒業生の進学率は，明確な数字が手に入らなかったが，80%近くになっているようで，隣りの赤来町と，松江市への中間点附近の三刀屋町とに県立高校があり，旧頓原地区からは通学可能なようである。旧志々地区は，中学校にも寄宿舎があるほどで，高校への通学は不可能であり，したがって進学率はそれほど高くはない。しかし，就職先から定時制高校へ進むという者を入れれば，やはり，80%程度は高等学校教育を受けることになるようである。さらに実態は不明確であるが，大学への進学を目指して，松江の高校に進む者も幾人かはあり，私立大学やその夜間部へ入学した者も少なくないようである。

島根県全体としては，中学校卒業者の就職率は1960年以来年々低下の傾向にあり，1699年には23.3%になっている。そのうち県外へ就職する者は60.9%であって，主な就職先を5位まで挙げると，大阪府（30.3%），兵庫県（12.2%），愛知県（12.0%），広島県（11.8%），東京都（4.7%）である。高校卒業者の就職率は，この10年間あまり変化がないが，1964年以降は僅かながら低下しつつある。1969年の就職率は67.1%であって，そのうち県外就職は67.9%を占めている。主な就職先を5位まで挙げれば，大阪府（41.3%），東京都（10.7%），広島県（9.6%），兵庫県（9.5%），愛知県（6.5%）である。このような傾向は頓原町に関しても大きくは異ならないと考えられる。

厚生福祉面では，保育所2があり，それぞれ3名の保母を持ち，1969年4月現在86名の幼児をあずかっている。老人については，町立の老人ホームがあって，定員以上の54名の老人が9名の職員によって世話されている。医療機関としては，国保直営の診療所があり，19床のベッドを備え，14名の職員を持っているが，われわれが調査に訪れた当時は，専任の医師が退職した後の適任者が得られず，困却しているようであった。この他，5床のベッドのある母子健康センターもあるが，利用者は多くないようである（1968年度148人）。さらに，授産場（ジュウタン）1があり，26人が利用している。

衛生面では，頓原地区，八神地区，角井地区にそれぞれ簡易水道があり，3地区合計315戸が給水を受けている。このような山間の農業地域として珍しいのは，村営のゴミ焼却施設があることで，旧頓原の268戸，旧志々の63戸を対象に1戸当り月額50円で収拾し，1日2トンを処理している。

通信関係では，有線放送電話があり，加入率99%である。一般電話は頓原，志々の二つの局を合せて，単独加入78，共同加入87，多数共同加入12，その他5で152の加入数である。

商工業関係では，事業所数208，そのうち，小売業93，建設業52，サービス業47などが主なものである。この小売業については，内訳をみると，1968年7月現在で，53が飲料・食料品小売業で，従業員92，年間販売額1億5,148万円，22が家具・建具・什器・その他の小売業で，従業者数38，年間販売額7,494万円，9が自転車・荷車小売業で，従業員18，年間販売額3,095万円，6が衣服・身廻品小売業で従業員13，年間販売額3,568万円である。その他5軒の飲食店があり，従業員15，年間販売額

1,556万円である。いずれも小規模のものであるが，各地区に店が散在していることを示している。

もっとも，旧54号線に沿った役場所在地の一帯は，商店が集まり，一寸した町の様相を呈しており，この町の他の部落とはかなり異なった雰囲気である。

さて，島根県の過疎は，先にも触れたように，「挙家離村型」といわれるが，1968年の1年間の挙家離村件数は，全県で114件であり，その約半数の54件が隠岐島である。頓原町は1件にすぎず，決して挙家離村が多いとはいえない。これに対して，出稼世帯数は，全県で7,124世帯あり，全戸数の3.5%に当るが，頓原町では180世帯あり，全町の戸数の15.9%であって，県全体に比べて明らかに高い。この出稼世帯180から181人が出稼に行っているが，農家が76.7%，非農家が23.3%である。181人中世帯主は141人，長男31人，主婦が8人，その他が1人である。出稼の産業別分類では，建設業83人，製造業75人が主なもので，出稼先としては，山陽地方114人，京阪神33人，県内25人が主なものである。出稼による悪影響は特別ないが，「破婚」3があげられている。

(6) **全体的印象** —— 頓原町は，われわれが選択した「いわゆる過疎地域」のなかでは，他の町村と若干異なったところがある。それは，中国山地の1町村であるにもかかわらず，それほど「奥まった」という印象のない地理的条件を備えている点である。すなわち，前項でも述べたように，東西に長いこの町は，南北には国道が走り，当然のように走り抜ける町である。東西には，三瓶山麓をかすめて大田市へ，また，途中分岐して北上すれば，出雲市へ抜けられるのであって，他の地域のように袋小路の奥といった条件はない。とくに，天皇の行幸を前にしての急速な道路整備が行なわれたため，一層その感を深くさせられた。

国道や県道をはずれた小道を入れば，他の地域と同様の山間部の農村といった感じはあるが，山が高々1,000 m一寸という程度では，山峡の寒村という印象にはほど遠い。田が多く，一見米作地である。町への第一歩が，舗装の完成した54号線であり，巾広い道を挿んで小中学校や寺院，商店，ガソリンスタンドなどが建ち並んだ交叉点を左折して，旧道の商店街に入ると，全く，頓原村ではない，頓原町だといった感じを抱かされる。

この「町」という名の部落を除けば，他の部落はそれほど町的ではないにもかかわらず，調査期間中その町はずれの宿を根城にしたためもあってか，頓原町全体が何となく町臭い感じを与えつづけたのであった。その他に，その第一印象の影響でか，町の人々のなかに何となく町の住人的というか，いわゆる村の住人とは違った，あるいは農家の人とは違ったものを感じさせられた。それは，何処となく，古くからの運命(サダメ)にただ従っているというのではないもの，祖先伝来の生き方に従がうことによってのみ本当の安らぎを得るといったものではないもの，土に生き土に帰るといったところに安心立命の境地を見出すという風ではないものを感じさせるのである。

概して人当りがいいこと，自分流儀を押し通したり押しつけたりするところが少ないこと，むしろ，都会流も心得ているのだというところを見せようとさえするように受けとられること，話の内容が，どちらかといえば理詰めで，悪くいえば，いつもソロバンをはじいて話しているようなところがあることなどがその町的印象の内味である。少々誇張していえば，どう考えても，どう計算しても勘定が不足なら，現在の土地を離れ，職をかえてもいいという結論が，感情抜きで出てくるような感じがあり，湿っぽさが少ないように思われるのである。いよいよとなったら「老人ホーム」へでも行こうか，といった発言が，しばしば聞かれたが，それがヤケッパチでもなければ「甘ったれ」でもないように響くのであった。

もちろん，農業機械の共同購入，共同利用や，牛の共同飼育のように，その方が得だとわかっても，他の気持がからんでどうしても踏み切れないといったところや，計算は成り立っても，最初に自分がやり出して万一失敗したらというところで踏み出せないでしまったりするところは，他の地域と変りのないところなのだが，しかし，底流としては合理的なものの考え方があるように思われた。

老人ホームが町立で設置されているのは，まだ例の少ないことで，こういう施設が作られること自体に上述のような人々の考え方が反映しているのであろうが，しかし，そのホームが定員を越すほどの盛況であり，しかも，その過半数は，町内に身寄りのある老人たちであると聞いては，この種の施設に対する考え方見方が，いい意味でも悪い意味でも，田舎的ではなくて都会的なのだと思わないわけにはいかないのである。

同じことの例であるが，農業機械の共同利用はできないながら，機械を持っている人が持っていない人の田畑を，日当を貰ってやってあげ，それで購入費の償却をすること，持っていない人はまた，日当を払ってやってももらうことで採算が合うと考えていることなどは，他の地域でも例のあることではあろうが，面接中の話としては仲々出てこないのに，この地域では，比較的アッサリと話に出てくることなどと合せ考えれば，上述の特徴に沿った事例であると考えられる。

われわれは，頓原町の調査に当って，全戸調査を行な

い，22の自治区のなかから10の区を抽出し，その各区から4戸を選び出した。そのためもあって，頓原町全体を一まとめにした印象を形成することはかなり困難である。また，実際，旧頓原と旧志々とでは，前者がより一層町的であるのに比べ，後者がより村的であるというような差違があるようであっても，これを一言でいうのは危険なようにも思えるのである。全戸調査の結果について，各戸での耐久消費財の保有状況を比較してみてもそのことがいえそうである。すなわち，22の自治区の中から，旧頓原の奥地である都加賀区と，最も町的な色彩の強い区の一つである敷波区をとり，旧志々では，三瓶山に近い分校所在地の角井区と，比較的山村色の濃い獅子区とをとり，それを比較してみると表5のようになる。この表によっても明らかなように，テレビ，電気洗濯機，ガスコンロや軽および普通自動車のように一様に高い保有率を示しているものもあり，その点では他の「いわゆる過疎地域」と同様なのであるが，他方，この四つの区の間で保有率に違いのあるものも少なくない（ゴチックで示した各品目，ゴチックは他の区に比べて高い保有率を示す）。大雑把にいえば，敷波と角井が他の区に比べて都会風であり，都加賀が最も山村風で，獅子がこれに近いということになろう。ともかく，頓原町全体を通じてという印象はまとめるのが難かしいのである。

表5　4区における耐久消費財保有率

区名	都加賀	敷波	角井	獅子
世帯数	40	65	50	23
テレビ(カラーを含む)	97.5	100.0	98.0	100.0
ラジオ	**52.5**	38.5	**48.0**	34.8
オルガン	—	**6.2**	**4.0**	—
カメラ	30.0	**41.5**	**48.0**	34.8
ミシン	65.0	**83.1**	65.0	60.9
扇風機	12.5	**52.3**	**46.0**	39.1
石油ストーブ	55.0	**73.8**	**76.0**	52.2
電気ストーブ	2.5	3.1	2.0	—
薪ストーブ	**2.5**	1.5	—	—
電気洗濯機	90.0	89.2	94.0	82.6
電気掃除機	30.0	35.4	**50.0**	26.1
薪風呂	97.5	81.5	96.0	100.0
電気風呂	2.5	**6.2**	4.0	—
ガス風呂	—	**6.2**	—	—
石油風呂	—	**3.1**	—	—
瞬間湯涌器	2.5	12.3	**46.0**	4.3
温水器	2.5	7.7	**14.0**	4.3
電気冷蔵庫	50.0	**78.4**	**86.0**	**73.9**
氷冷蔵庫	—	—	**2.0**	**4.3**
ガス炊飯器	52.5	64.6	58.0	78.3
電気炊飯器	**40.0**	29.2	**38.0**	17.4
ガスコンロ	80.0	81.5	80.0	73.9
石油コンロ	10.0	13.8	**20.0**	**21.7**
電気コンロ	12.5	7.7	6.0	13.0
電子レンジ	—	**3.1**	—	—
自動二輪車	**67.5**	50.8	38.0	52.2
軽自動車	32.5	30.0	34.0	34.7
普通自動車	22.5	21.5	20.0	26.0

町の人々も，頓原地区の方が交通も便利で，都会風で，とくに中心部の人たちは違う，といったことをいうし，志々地区の方が農村的で遅れており，恵まれていないというのだが，そうはいっても，角井区などは観光地化された三瓶山や志学温泉のすぐ隣りであり，大田市にも近く，有料道路の喫茶店に働きに行っている人もいて，むしろ，都市近郊農村的な感じが強い。観光客目当に，減反分の田を釣堀にかえた人もあり，小さな店を出した人もいるし，また，三瓶山麓部分に別荘地開発が行なわれているのである。逆に都加賀区の奥などは，開拓農家がすべて離村してしまったような山奥であり，町区の人々から「田舎者」として特別視されていた過去も近いのである。

国道の整備に伴う交通や物資運搬の便宜増大や，三瓶山観光開発に伴う観光客の増加などによって，頓原町は，いわば近郊農村的色彩を帯びつつあるといってもよい。三瓶山麓の別荘が，広島市民にとって手頃な距離であるように，広島市は頓原町民にとって手近かな稼ぎ場である。まだ少数ではあるが，広島市にセカンド・ハウスを持っている人々もいるのである。前項でも述べたように，正式の就職はともかく，家計の一助のための出稼先は，広島が最も多い。この出稼を通じて，山村の良さを再認識する人も少なくないが，他方，都市生活に順応し，そこでの労働に魅力を感じ，都会へ移住する人々も出てきているのである。

全体として頓原町の人々から都会風の印象を受けるのも，このような変貌の波にさらされ，次第に近郊農村的意識が培われてきているからかも知れない。われわれが行なった全戸調査での，町での居住に関する意見と町政に対する意見との調査結果は，別稿で報告されるが，ここでは，県が行なった山村振興法にもとづく振興対策のための標本調査での，町民からの標本114世帯についての「意向調査」の結果（1970年実施）を見ると，志々地区と頓原地区で相違する点もある。「町は今後発展する

と思う」人は頓原地区に多いが，全体で42.1%あり，そう思う理由として「森林・土地・水等の資源に恵まれている」（68.8%）に次いで「交通機関に恵まれ，かつ，市場までの所要時間が短い」を，頓原地区民の25%が挙げているのである。逆に，「今後は一層悪くなると思う」人が理由として挙げているものの第一位は「不便で生活しにくい」であるが，志々地区民の3分の1は「交通機関に恵まれず市場までの距離が遠い」を挙げているのである。これから考えても，道路の整備が頓原町の人々の意識を大きく変えていくことは確かであるし，徐々にではあるが近郊農村化ししつつあることも間違いではないと考えられるのである。

この調査の結果をさらに眺めてみると，町の人々の意向がかなり推しはかれるように思われる。すなわち，山村振興のための施策として優先して欲しい希望の順位は次のようになっている。すなわち，

1. 交通施設
2. 産業の振興
3. 文教施設
4. 厚生施設（含医療）
5. 国土保全施設
6. 未利用資源開発
7. 通信施設

である。また，「期待する産業の種別」としては，両地区で異なり，

	全体として	志々地区	頓原地区
1. 農　業	42.1%	54.8%	34.7%
2. 畜産業	40.3	23.8	50.0
3. 林　業	16.7	19.0	15.3

となっている。畜産に関しては84.8%が肉牛の飼育を望んでいる。さらに，標本世帯の90.4%が現在の居住地に住みつづけたいと願っているのである。つまり，要するに，全体としては，現状維持であり，そのままでさらに収入が増加し，交通が便利になることを望んでいるといえよう。そうしてみると，この町の人々が，都会風で，合理的なものの考え方をしているようだ，といっても，現状を大転換することをまで空想するような度外れたところはなく，与えられた条件を緻密に検討し，そのなかから，着実に実績（収入）のあがる道を探していくという生き方をしているのだといえる。

多い上にも多い収入を，と考えて生活していることは，出稼の理由や動機を尋ねても，耕作のことを質ねても，ほとんどの人から，概算額を示しながらの話になることに特徴的に現われている。例えば，一家が暮していくためには，年間80万円は必要であるが，米作からの収入は36万円見当，肉牛は高々6万円，そうすると出稼で残りを補わなければならない。遠隔地へ出るのは諸事不都合なのだが，収入のことを考えると，やむをえない，といった具合である。また，今年は台風のために米が不作で，約16万円の減収になる，そこで3ヶ月程出稼しなければならないが，広島辺りで済ませようと思う，といった説明がなされたりするのである。冬の間，これといった仕事がない，家でノンビリしていては勿体ないから出稼に出る，これで若干の貯えもできる，といった働けるだけ働くという考え方は，他の「過疎地域」と同じであるが，概算にもせよソロバンを入れて考えるところに特徴があるといえよう。ある子ども（中1）が，家族1日の飯米の量を母に尋ね，1年間の食費等を計算し，「結局村に居なければならない必然性はない」と主張した話を耳にしたが，この町の人々の考え方の特徴をあざやかに示しているように思われるのである。

しかし，他方では，計算できない悩みもある。他地域と同じように，嫁になり手が得られないことである。娘を持つ親は例外なしに村で百姓をさせようとは考えていないが，息子には村に住みつく嫁をと考えているのである。この嫁飢饉は，他の地域ほど深刻な問題としては考えられていず，むしろ，百姓は自分たち一代限りだ，という人の方が多かったのであるが，しかし，農家の跡継ぎとして村に留まった息子が，30何才になるのに嫁が得られない悩みをかかえている家もあるのである。わが息子とわが娘についてのこの考え方の違いが，着実に農家を減少させていく結果を招くと考えられるのである。

われわれの研究の直接の目的ではないが，農村を崩壊させていくものの考え方や，その考え方を生み出すのに大きく影響している農業対策から考えていかない限り，農村は崩壊し去るのではないかとさえ思われるのである。

5. 熊本県球磨郡水上村

(1) **調査期間**——1971年7月15日～19日。本年水上村へ面接調査に出向くことになったのは，次のような事情による。昨年の調査の4地域について，若干の地域差のごときものが見られはしたが，基本的なところでは，むしろ共通性が高いように見受けられた。この地域差か共通性かを検討するのに，もう一ヶ所異なった地方の調査をしたいと考えていた。たまたま，続が，熊本大学に集中講義を依頼され，それが7月上旬であるところから，講義終了後に熊本県下の「過疎地」を調査しようということになった。熊本大学の鈴木康平助教授の協力によって，水上村との事前連絡もでき，また，申請していた科学研究費総合研究の交付が決定したので，その研究の一環としての位置づけもできたのであった。

(2) **調査参加者**——続有恒，久世敏雄，水山進吾，鈴木康平，松田惺，織田揮準，永田忠夫，植村勝彦，蔭山英順，鈴木真雄，続仲彦*，太田千恵子**。以上12名によって6班が編成され，他地域よりも短日時で調査が完了した。

(3) **面接ケース**——44。標本家庭は，村の社会教育主事小松数雄氏を煩わして，他地域と同様の条件を充すように抽出して頂いた。この他，昨年の調査とは異なり，中学生に集団面接をすることとし，水上中学校全生徒を2回に分けて実施した。その詳細は，集団面接に関する報告の際に触れる。

(4) **人口の推移**——1950年（昭和25年）以降の人口の推移を見れば，表6の通りである。

表6　人口の推移（水上村）

年　度	人　口	増減率	世帯数	増減率
1950	6,944	—	—	—
1955	7,155	＋ 3.0%	1,335	—
1960	5,896	−17.6	1,188	−11.0
1965	5,141	−12.8	1,127	− 5.1
1970	4,410	−14.2	1,078	− 4.3

この表によれば，1955年から1960年にかけて急激な人口減がありそれが大体において今日まで引続いている。1970年には人口密度は22.9人で熊本県下101市町村のなかで99位の少なさである。

1960年と1965年の年令別人口を比較してみると，表7のようになる。この資料は，年令段階を10才刻みにしてあるため，頓原町のように，5ヶ年間の増減率を計算することができないけれども，20〜29才の段階の辺りを注目すれば，この5ヶ年間に10才台後半から20才台前半の人口が激減していることがうなづける。

表7　年令段階別人口

年令段階	1960年	1965年
70才以上	231人	240人
60〜69才	349	390
50 〜 59	481	475
40 〜 49	596	623
30 〜 39	793	772
20 〜 29	860	527
10 〜 19	1,155	1,113
0 〜 9	1,431	1,001

また，表6に戻るが，人口の減少率に比べて世帯の減少率が低いことは，若年層の流出の著しさとともに，長期出稼の増加を予想させるものである。

(5) **村勢一般**——水上村は熊本県の南東部にあり，球磨川本流の水源地をかかえている。明治28年（1895年）岩野村，湯山村，江代村の三ヶ村を廃止し，合併して水上村となった。岩野，湯山，江代は水上村の3地区として残っている。

水上村は国鉄肥薩線人吉駅から分岐している湯前線の終点，湯前から1粁ほど北で球磨川に突き当る辺りから北方へ高くなっている山稜をたどり，三方山(1,236m)，高塚山（1,508m），石楠越（1,391m，この辺りが球磨川の水源である），水上越（1,458m）を経て，九州脊稜山脈に突き当り，宮崎県との境に至るまでの間に，南は多良木町，北は五木村および泉村に接している。脊稜山脈に沿って南へ銚子笠（1,489m），不土野峠（1,081m），江代山（1,607m），湯山峠（948m）を経て市房山（1,722m）に至り，南西に連なる牧良山（996m）までの間，宮崎県と接している。市房山までが椎葉村と，市房山から牧良山までが西米良村との境である。牧良山から尾根を降って市房ダムの附近から球磨川沿いに境して湯前町と接している。

村の入口附近で球磨川に合流している川内川の沿岸と，合流点からダム附近までの球磨川流域が岩野地区であり，ダムから東へその縁を通り，湯山川に沿って，椎葉村へ抜ける県道を包んだ形の一帯が湯山地区であり，ダムからさらに球磨川本流を溯り，本流と横才川，魚婦川の2支流を含む広大な地域が江代地区である。

川内川を溯って三方山の南を五木村へ抜ける道，球磨川本流を溯り三方山の北を五木村へ抜ける道，石楠越および水上越を越えて泉村へ抜ける道2本，不土野峠を越えて椎葉村へ至る道などがあるが，いずれも車は通れない。僅かに，整備不良ながら，湯山峠越えの道だけが隣接村への車の抜け道である。したがって，球磨川に沿って西南方面から村へ入るのが実質的には唯一の道で，一種の袋小路となっている点が，上村や大蔵村と似た点である。定期バスは，湯前町から貯水池沿いに湯山と古屋敷（江代地区の中心）とにそれぞれ走っている。

1968年度の村勢要覧*によれば，水上村の面積の91%は

* 学部学生
** 研究補助員

* 水上村はわれわれが訪れた直後，集中豪雨に見舞われ，さらに8月初頭，19号台風によって大被害をうけた。このため，最新の資料の提供方を依頼しておいた村当局は，災害救助，復旧のために忙殺され，これ以上のものを手にすることができなかったのである。

山林で，そのうちの51.4%が個人所有の山林である。なお，国有林は12.6%，県有林は6.8%である。耕地は全村面積の2.2%，375*ha*で，田が263*ha*，畑が103*ha*，樹園地が49*ha*である。農家戸数は623戸（55.3%）で，そのうち50*a*未満の小百姓が278戸（44.6%），1*ha*以上の百姓は125戸（20.1%）である。農産物の生産額は1965年度で総額1億2,626万円であるが，そのうち米は水稲，陸稲を合せて9,653万円であり，他は僅かである。林産物については，4億5,492万円の生産額を示しているが，このうち木材（素材）が3億9,036万円であって，その他に見るべきものとしては，林野副産物（椎茸等）4,307万円がある。観察したところでは，耕地とくに田は，湯山地区が最大で，岩野地区に若干あり，江代地区は極めて少ない。大勢をいえば，林・農業および林業に従事する者が中心の村ということになろう。

就業者1人当りの生産所得は約40万円で，全国平均約48万円よりもかなり低く，熊本県全体の平均約42万円よりも低い。この村の産業上の特徴の一つは，小売業（商店）が多いことで，事業主が76で全事業主の11%を占めていることである。小売業に従事する者は，全就業者の7.9%もある。また，製造業主が19（2.8%），就業者225（9.9%）も他地域に比べると多いが，この大半は焼酎製造である。

村の財政については，1966年度の一般会計決算で見れば，総額1億2,466万円で，そのうち村税は2,459万円（19.7%）にすぎず，国からの交付金，交付税，支出金は合計5,235万円（42.0%），県の支出金は369万円（3%）に及んでいる。村税の内訳は固定資産税1,384万円で村税の56.3%に当り，村民税は255万円，タバコ消費税281万円，木材取引税451万円がそれに次いで主なものである。

教育についても十分な資料がないが1967年5月現在と1971年5月現在とを比較すると，表8のようになる。この表によれば，児童・生徒数の著しい減少が知られる。

表8　　学　　校

学校名	児童生徒数 1967年	児童生徒数 1971年	学級数 1967年	学級数 1971年	教員数 1967年	教員数 1971年
岩野小学校	240	173	8	6*	10	11
岩野小川内分校	12	13	1	1	1	1
湯山小学校	278	199	9	6	10	8
古屋敷小学校	107	90	6	6	8	8
古屋敷小柳原分校	51	28	3	3	4	4
水上中学校	466	294	13	8*	25	20

＊は他に特殊学級2ずつがある。

中学校および小学校はすべて体育館兼講堂を有し，また分校をも含めて特別教室を有している。これは1958年頃から年々児童・生徒数が減少してきたことに伴う，施設の余裕によるものといえる。なお，村は1967年度に，学校給食センターを建設し，給食の充実を計っている。さらに，スクール・バスを3地区に運行して通学の便をはかっている。

中学校卒業生の進学状況は，1971年春の卒業生についてみると，地区によって差があるが（岩野地区57.8%，湯山地区35.8%，江代地区30.0%），全体としては進学率は42.2%で決して高くはない。進学先は，女子は隣接町の多良木高校が多く，男子は普通科なら人吉高校，農業科なら球磨農高，工業科なら球磨工高に集まっている。多良木高校以外は岩野地区からでも通学困難である。卒業生の54.7%が就職をしているのであるが，そのうち59.4%が県外へ就職しているのであって特に女子に多い。県外就職の行先を多い順に5位まで挙げれば，愛知県，大阪府，兵庫県，岐阜県，福岡県の順になる。職種を多い順に3位まで挙げれば，男子では「建築・大工」，「金属機械工」，「農林業」であり，女子では「紡績工」，「准看護婦」，「縫製組立工」である。1972年卒業予定者の進路希望調によっても大体の傾向は同じである。

厚生福祉面では，岩野，湯山，古屋敷（江代地区）に保育所があり，それぞれ40～60名の幼児を保護している。保母は2～3名で，他に調理士1名がいる。

簡易水道は，湯山，岩野，古屋敷，本野高澄（江代地区の奥地）の4ヶ所に分けて設けられ，73.5%の世帯に給水している。

資料がないが，訪問した限りでは，テレビのない家は皆無であって，ほとんですべての家に入っていると考えられる。

なお，水上村には前に触れた通り，市房ダムがあり，村はこのダムの人工湖を抱えた形になっているが，ダムは1960年に完成したものである。建設省による多目的ダムであるが，この建設によって235世帯，田39*ha*，畑19*ha*，宅地2万8千坪，山林88*ha*が水没し，また，小・中学校，役場，森林組合，診療所等も水没した。これに伴うさまざまの問題があったであろうが，その点については詳かでない。

また，市房山は熊本県第一の高山であるばかりでなく，中腹には市房神宮があり，古来，武の神，縁結びの神として近郷の人々から敬まわれ，「お岳参り」が行な

われている。山麓一帯には昔から自然湧出の温泉が点在することもあって，市房高原にはキャンプ場も設けられ，観光客も漸増の状況のようである。このような自然条件もあってか，調査当時，この地区に1億円を投じての「過疎センター」を建設することが決定したと報じられていた。

(6) **全体的印象** —— 湯前町から水上村へ入るときには，小さな橋を一つ越えるだけで，そこに広がる風景は，ありふれた河川流域の農村風景である。そこに誘致した縫製工場などもあり，焼酎の醸造場も点在し，全く「何が過疎か」と思われるような印象である。この村はダムによってハッキリと二分された形だが，ダムから下流の本流沿いは，そのような，むしろ人気の多い感じなのである。

しかし，先ず，川内川に沿って，岩野地区の奥へと入っていくにつれ，印象は次第に変ってくる。山はそれほどそそり立つ感じではないが，田畑は少なく，崖の蔭などに点在する民家は，いかにも山村らしい風景を作っている。道は川沿いに曲折し，右岸を行ったり左岸を行ったりする。もう人家は無くなるのではないかと思われるその先に，また数軒の小部落があったりするのである。

ダムへ上るのには二つの道が分れている。左側へ上れば江代地区で，右側に人工湖を見ながら，未舗装の広い道を行くと，しばしば材木を満載したトラックの物凄い土埃りを浴びることになる。橋を渡って左側に球磨川を見おろすようになると，昔のままの山道に近くなり，崖に沿って曲折しながらの上り道は，角ごとに対向車が気になる。点々とある小部落を過ぎて，橋から6㎞ほども走ると，江代地区の中心部古屋敷である。崖の上の小学校へ入る坂を横切って，溝を溢れた山水が流れている。岩のゴロゴロした魚婦川を渡った小橋のたもとに診療所がある。小さな店が三，四軒点在するこの中心地には，しかし余り人気はないのである。魚婦川沿いに山道を行けば，一寸した田園風景はあるが，それもやがて山林の真中へ入ってしまう。診療所の前を抜け，今にも落ちそうな木橋を渡り，球磨川本流に沿った道をいくと，車1台がやっとの凸凹道で，これこそ全くの山村である。古屋敷からさらに数粁入ったところに，村随一の製材所があり，機械が大音響をあげているが，そこまでの途中には人影極めて僅かである。人間とはかかわりなく，機械が勝手にわめいているといった感じである。

ダムの右側を上り，人工湖を左に見て行けば，その道は江代地区と同じような広い道なのだが，車の走った跡が際立ち，また，手入れもずっと頻繁に行なわれている形跡がある。湯山地区は，江代地区よりも活気があるように思われる。人工湖のはずれで湯山川を渡ると，舗装された道の両側に人家が建ち並び，一寸した町の感じを受ける。横丁に入る角ごとに同じような雑貨店があり，保育所，郵便局，診療所，旅館，醸造場などがある。この中心部を抜ければ，田の多い田園風景で，次第に登りながら市房山麓の高原状の畑地へと続いていく。この辺りには開拓部落もあり，水上村の農産物の大半はここで収穫されるのではないかと思われる。日曜日などには，村外から入ってくる車もかなりある。

このような水上村の3地区を，地区に関係なく分ければ，農村部（岩野地区の一部と湯山地区）と山村部とになるだろう。そして，山村部を代表する江代地区と農村部の湯山地区との間には，人工湖を一周する道を使って往来は容易であるのに，この一周道路のその部分は，往来は極めて少なく，路面に草がはえている有様である。このことは，江代と湯山の両地区が，ほとんど没交渉に生きていることを示し，それほど相互に共通性も相互依存性もなく，村役場のある岩野地区を媒介として連絡を保っていることを示している。その意味では，この村も，頓原町と同様に，一括して印象を述べることは容易でもなければ妥当でもないのである。

しかし，それにもかかわらず，この村の特徴らしい点が二，三ある。その第一は，面接家庭の中にも多かったのだが，椎葉姓で代表される宮崎県椎葉村からの移住者およびその子孫が多いことである。それは3地区のいずれにも居住している。7～8代前に移住した家もあるし，父母の代に来た家もある。椎葉村との姻戚関係もかなりあるのではないかと思われる。この村には多すぎる程の商店があることは前項でも触れたが，湯山地区にある商店の少なくとも一つは，県道を通って湯山峠を越えての商売に椎葉村へ往復しているのである。椎葉村は宮崎県の奥地の一つであることは周知の通りであるが，その椎葉村から見て，水上村が移住先になっているということは，他地域とは違った大きな特徴といわなければならない。日本列島の表と裏というとき，中国地方と九州とはその表裏が交叉して，大分県，宮崎県が裏で，福岡県，熊本県が表になるが，この裏側から表側への移住というところに，全国に共通の傾向が認められるように思われるのである。ともあれ，それらの人々にとっては，水上村は，いわば離村先であり，ここで何とか頑張らなくてははならない場所である。そのことが，村の挙家離村をくいとめる力の一つになっているのではないと思われるのである。

第二に，それと関係があるかも知れないが，水上村の出稼は，かなり長期のものが多い点である。出稼という

よりは，むしろ夫婦別居とでもいうべきものさえある。1年間のうち，正月に数日帰るだけという壮年の夫がいる。椎葉の出である。「今一番ほしいのは，焼酎と女だ」と便りを寄越す。それでいて，妻と2児を呼び寄せる決心がつかないのである。同じく，年に一度帰る父がいる。長男に思う存分の営農をさせるためと称し，一日でも人を減らそうとの考えから，鉄道の保線工をしているのである。もちろん，県内の八代市辺りへ出ている人も少なくはないのだが，上の例のような長期出稼が多いことも事実である。このようにしてまで村につながりを残そうとする気持が，どこから出て来るのか。山形県大蔵村沼の台地区とも違うようで，この村の特徴の一つに違いないと思われるのであった。もっとも，この長期出稼の人々は，特別腕に特技のある人々ではないようであるから，何年外で働いても，家族をすべて呼び寄せるような安定した職場が得られないのかも知れない。上の例とは別に，特に畑も多くなく，山林もない家の主が，妻子を村に残して愛知県に出ているのだが，妻は妻で山林労務者として働いており，中学1年の男の子が，風呂をわかしたりして母の帰りを待つといった家もあるのである。夫は収入のよい都会で，妻は家の近くで，共働きをしながらどうにか生活が成り立っているのであって，都会に一家が集結しての生活の設計に確信が持てないのでもあろうかと思われるのであった。

第三には，長期出稼の理由でもあろうかと思われるが，中学生の就職先が県外が多いこと，しかも，それが京阪神や東海地方が主であることからも理解できるように，手近かなところに職がないことである。熊本県をはじめ，鹿児島県，宮崎県など九州の大部分の県は過疎県である。後にも述べるように，過疎地は既に養いうる以上の人口をかかえている所とも見ることができる。したがって，水上村の人々が村の内部にはもちろんのこと，比較的近接した土地に職を見出すことは，決して容易ではない。宮崎県との境の，熊本県の奥地から，京阪神や東海地方に出ていくことは，島根県頓原町などと比較しても，相当な大決心を必要とするし，また，安易に往来することもできない土地への転出であるわけである。八代市や熊本市へ，いわば気軽に働きに出るということのできないこの村での出稼が，生半可な出稼ではないことは確かである。

最後に，水上村では，意識的に，「一体どれだけの山林や水田があれば一家族が現在程度の生活を維持しつつ生活できるのか」を質ねてみた。何人かの人の答はほぼ一致しており，一家族当り年間生産所得200万円程度を目標にすると，山林では30*ha*，田では3*ha*が必要であるとされた。今，仮りに，この村の民有山林を30*ha*単位で配分するとすれば，大体308家族，全林野を配分するとして585家族，田畑を3*ha*ずつ配分するとして約120家族，合計で430～700家族が自活していける勘定になる。公務その他の職業の家族を約100家族と考えても，510～850世帯となり，現状は少くとも200世帯，多ければ500世帯が超過していることになる。このような再配分は非現実的であるにしても，現状がいかに過大な世帯を抱えているかは疑いもないところであろう。かくして「過疎は過密である」という表現が成立する。もし，この単純な計算が正しいとすれば，今後なお700～1,700人の人口減が起らねばならないことになる。

水上村の人々は，冷静な打算で動くというよりも，気分の論理で行動するような印象がある。伝統的な生き方が通用する間は，それに従がっていることによって気分の安定も得られるが，最近のような生き方の変貌，多様化，混乱が起きている時代には，判断が難かしく，追いつめられて自棄的になったり，思考の面倒さに厭気がさして，一か八かのリスクをかけるような行動が生れたりする。「今の世の中では，どうしたらいいのか判らない。とにかく村にいては喰えないことが確かなのだから，とにかく，都会へ出るほかない。出ても駄目な場合もあるかも知れないが，みすみすジリ貧的に行きづまるよりはマシだ」といった考え方が，行動を決定して行っているのではないかと疑われるのである。

Ⅳ　いわゆる過疎について

われわれの研究の目的は，既に述べたように，過疎状況下における家族内関係，家族間関係を捉えていくことにあり，そのための方法としては，自由面接による発言の記録を一々吟味しつつ，これに基づいて立論していくという方法を試みることであった。そのために，既に4地域の原資料を整えた「研究資料」No.1～4を作りあげたのである。(1) しかし，以上5町村を訪れてみて，いわゆる過疎というものをどう捉えるかを，全く考慮の外におくわけにはいかないことに改めて気付かされるのである。過疎とは何か，過疎をどうするかは，われわれの問題ではないが，過疎現象――若年層の流出，出稼の恒常化，挙家離村の漸増など――を生起させている事情を，いかに把握するかは，われわれの今後の研究にも影響を及ぼすのである。

前章の各地域の全体的印象では，むしろ，各地域の個別的特徴を指摘することに偏っていた感があるので，ここで最後に，5つの地域を通じて，過疎の底に横たわるものを考えてみたい。

(1) **生活の変貌**——山村や農村の生活は，誰でもが知っているように，原則として「採れるものによってまかなわれてきた」いわゆる自給自足の生活であった。衣・食・住の基本的なところは，栽培したり採取したりするものでまかなえるのが自然である。敗戦後の何年間かは，このような基本的な生活の可能なことが，都市住民からは大きな羨望の的であった。しかし，そのような自給自足の生活はもちろん文明からは遠く，伝統的文化の継承による味わいや重味はあるにしても，文明の進展に伴う変化からは取残されていく性質のものである。

文明の便宜を徐々にしか受けなかった農山村が，ここ数年あるいは7～8年の間に急激にそれを取り入れるようになった。面接した家庭での話では，テレビが大体東京オリンピック頃に一挙に普及したようである。電気洗濯機もその前から着実に普及しつつあった。冷蔵庫，自動車，あるいは電話などが，次々と村の生活に便利さをもたらした。このことが可能であったのは，1960年前後，相対的に農家の収入が豊かであって，これらの便利を購う資力があったことによる。ともあれ，このような文明の導入が，古来からの村の生活を根本的に変貌させてしまった。文明の利便を享受するには，自給自足では不可能である。財そのものの購入は，出来秋払いででも可能であるが，購入したものを使用する段になると産米で支払うというわけにはいかなくなる。いわゆる現金が常に必要となるわけである。

いわば，物で支払っていた時代は去った。現金収入が不可欠のものとなった。このことが村人の生活をすっかり変えてしまった，といってよい。「現金なしでは1日も暮せない」という生活になったのである。空気は確かに澄んでおり，四季折々の風物は見事であり，水は清らかで，道には騒音もない。しかし，現金収入を得るには甚々不都合な土地が，それぞれの町村なのであった。文明の恩恵を受けるために必要な経費を現金で支払わねばならぬところに，過疎が根をもっていることは間違いがない。

いわゆる過疎の村々の生活が，主として自給のための生産中心から，高水準の文明生活をするための現金収入中心の生活，すなわち，消費優位の生活へと転換してきたのである。過疎地の人々の頭の中を占領しているのは，いかにして現金収入を確保するか，の一言につきるといっても過言ではないのである。

そのために，具体的には人々の生活なり生活態度なりがどう変わったか，といえば，乏しいチャンスを取り逃すまいと必死になり，あらゆる機会に現金を得ようとするようになった。一家の主婦が土木工事に出かけるということも，そのために発生した現象のようである。自家用野菜も満足には作らず，衣服の繕いも満足にはせず，育児に割かれる時間も惜しいという風になったのも，1日や1時間を，得られる現金収入の額で測るようになったからである。

(2) **現金追求の悪循環**——出稼は，現金追求の一手段に過ぎない。一般に，過疎の村々やその近くでは，都市に比べると労賃が極めて低い。大凡のところ，単純な労務では都市での半額に過ぎない例さえある。このことは，経済的な視点から見れば，村々では労働力が余っていると見られているからであり，また，実際，それだけの賃金で働く人がいるからである。そこで，現金収入を増すためには，家族と離れての生活経費や不自由さを差引きしても，都市へ出る方が有利だということになる。その場合，一方では，都市の一隅での生活ではあっても，ますます，文明からの刺激を受け，文明の利便への欲求が開発され，他方では，ゆとりをもって出稼するための工夫として，より多く生活に機械を導入することになる。例えば，農業機械の多くは，この目的のために導入されている。機械の共同購入，共同利用が進まないのも，その辺に原因の一つがある。

かくして，現金追求のための手段としての機械導入は，さらに現金の必要性を増加させることになり，追求すればするほど必要性に迫られるという悪循環を形成していく。一方，都市生活に伴う新しい欲求開発もまた，現金追求の必要性を増加させていく。例えば，小さいことではあるが，食事の嗜好の変化なども，案外見逃すことの出来ない点である。過疎の村々の商店に並べられている，インスタント食品や缶詰類，ビニール包装の嗜好品などは，それを示すものといえよう。

このような悪循環によって，現金追求の，消費性の高い生活が，ますます加速されていくことになり，人々は寸暇を惜んで働かねばならない結果となっている。そこには，勤労のたのしみもなければ，余暇をたのしむゆとりもない。ただ，ある水準の生活を維持するために，ひたすらに現金を求める日々しかないのである。村人の連帯感が薄くなり，村への帰属意識が弱まり，個々の家族がむしろ孤立し，競争し合うといった家族の集合体が村だという事態が生まれてきつつある。

(3) **村の魅力の喪失**——稼ぎようにも稼ぎ場のない村。それだけでは決定的に少ない伝来の職業（農業や林業）。働いても働いてもこれでいいという限度のない現金の必要性。ここから，村に住むことの魅力が涌いてくるわけがない。子どもたちはもちろんのこと，親たち自身が，自分たちのような生活を，わが子にもさせたいと

は思っていないのである。出稼に出る男たちの苦労もさることながら，留守をまもり，現金収入の一端をも荷い，かつ，自家用の主食の確保のために汗を流さねばならない女たちの苦労は，自給自足時代のそれに比べて減少したどころか，却って増大しているといわなければならない。

このような苦労の生活を，母親がわが娘にさせたいと思わないのは無論のこと，父親としても，願うわけがない。ほとんど例外なしに，「娘を農家にやろうとは思わない」と親たちはいうのである。

しかし，娘だけではない。息子たちに対しても，「この村で暮せというのは無理だ」と思っているのである。もちろん，祖先伝来の土地に対する切っても切れないつながりを何とか保ち続けたいと願わない者は少ないのであるが，いざ，わが子にそれを強制するのには，余りにも苦労が多すぎると感じているのである。親がこのような気持であるから，子どもたちは，まして，村の生活に魅力を感ずるわけがない。万一の場合の避難所として，家屋敷を残しておきたいと願っている子どもたちは多いのだが，それは自分たちの都合なのであって，村を考えてのことではないのである。夢多き子どもたちは，かくして，未練もなく村を後に飛び立っていく。若年層の流出の主流はここにあると考えるのである。

村で，一家の主婦として生きていこうと考える娘のいないことは，若者たちにとってはもう一つ村の魅力を失なわせる原因となっている。「嫁飢饉」の村で頑張ろうという若者がいないのは，あまりにも自然である。「村なんかにいたのでは嫁の来手がない」と考えて村を去り，村に帰らぬ若者も少なくないのである。娘の嫁ぎ先が，村内や隣村辺りに限られず，遠くの他県にまで及んでいるだけでなく，息子の相手もまた，さまざまな土地の出身者になりつつある。

村外で結ばれた二人が，なかには同村の者同志の場合もあるが，飛び立って来た村へ帰ろうと考えるには，村が相当の魅力をもつまでに変化しなければならない。少なくとも変化して見えなければならない。その一つの条件は都市の生活の汚濁や荒廃であるが，それは誰にとっても望ましいことではないから，村の魅力の恢復は極めて望み薄なのである。

村に残った両親は，今更都市生活への再適応をする気力も能力も少ないままに，2人だけの寂しい生活を送ってはいるものの，年令が進むにつれて生活力を失ない，観念して子どもたちの所へ出ていく人も現われる。まして，配偶者を失なった孤独な老人は，余程の気丈さがない限り，村での生活を続けることはできない。挙家離村の半数はこのようなケースといえよう。

＊　　＊

人は生れ育った土地に帰って住み，そこを発展させ，やがてその土地の土に帰るべきである，というような立場に立って過疎を考えるものではない。人々の移動性（mobility）は増大している。国内はもちろんのこと，国外へまでも移動し，そこで生涯を送ることは本人の自由である。この立場からすれば，過疎問題は，過疎地にいかにして住民を引きとめておくかの問題ではなく，如何にして住民の定着性が喪われ，移動性が増大するかの問題となる。以上述べたことは，この視角からのものであった。

しかし，生れ育った土地に住みつづけたいと願いながらも，事情やむを得ずそこを離れざるを得ない状況に追いこまれている人の少なくないことも事実である。このように，不本意ながら村を出ていく人々に対し，いかなる施策を講ずればよいか，の問題が，過疎対策の中心問題であろう。その際，その施策の立案・実施の中心となり，原動力となるものが，当該過疎町村で適当であるかどうかは十分検討する必要がある。例えば，医療の問題については，医科大学新設等の動きもあるが，他方において，医療を，個人開業医中心の制度として考えていくか，病院勤務医中心の制度として考えていくかの問題もあり[(2)]，また，医療の内容によって，人口何人に対して担当医何人が必要かという観点も忘れることはできない。内科医は，開業制の場合，人口5,000人につき1人が適当であるとの主張もあるようであるが，このような考え方では，長野県上村や愛知県富山村などでは，村の専属の形で医師を考えることはできないことになる。仮に人口5,000人に対して内科医1名とするならば，当然，自治体の枠を超えたところで考えなければならない。まして，富山村のような場合，自然的条件からして，同一県内の他町村よりも，他県の町村との関係において検討していかざるを得ない。

医療ばかりではなく，教育にしても，福祉厚生にしても，当該過疎町村内で考えていては解決のつかない問題がほとんどである。当然，より大きな自治単位（府県など）で考え，必要によってはそれらの協議機関において検討すべきものである（例えば富山村のような場合）。島根県，熊本県のような県としても過疎化しつつある府県では，少なくとも県全体としての取組が中心となるべきである。場合によっては，零細町村の併合または連合（連合村）を考想すべきであろう。

この場合，第一に考えるべき施策は，道路を中心とする交通の整備である。交通の便宜の増大は，しばしば，

人口流出を増大させている。しかし，そのことは，交通の不便さの故に，低水準の生活を甘受していた者が如何に多いかを物語りこそすれ，決して，交通整備が過疎対策として不適当だということを意味するものではない。交通の改善は，人口の流出にも役立つが，外部からの進入にも役立つのであって，村民の行動圏が拡大し，交渉圏が拡大することである。充実した医療機関の利用も，福祉施設の活用も可能になることである。そればかりではない。それは，都市と過疎村との間の賃金格差の縮少にも役立つであろう。

やや視点を変えていえば，山形県大蔵村にしても，長野県上村，愛知県富山村，熊本県水上村にしても，（詳かではないが島根県頓原町にしても）かなり古い時代から人々が住みついている。しかし，その住みついた人々は，往古の不便さ困難さを乗り超え，苦労をしてそこに生活の場を築いたわけであるが，察するに，その人々は，その不便さによって身の安全を守りえた人か，あるいは，不便さをも越えて住まざるを得ないような，いわば，「はみ出した人たち」であったかのいずれかであったであろう。その意味では，山中の孤立した村は存在の意義があったわけである。

しかし，今日になって，山峡の難路が意義を失なってくると，また，平地の都市が，むしろ人手を求めているようになると，昔はみ出した人が帰っていくのは当然であるし，また，山裾にかくれ住んで世を忍ぶ必要がなくなってみれば，広い町へ帰るのもまた当り前である。少なくとも，これらの町村は，わが国全体のなかで，まず最初に人が住みつくような土地でないことだけは明瞭だといえよう。住みつくべき事情があって住みついた人がいたのである。ここで改めて，今日のわが国全体の状況から，いかなる意味においてこれらの町村に人が定住する意義が見出せるかを，現住の村民とは別に検討してみることも必要であろう。

そうすれば，姑息な「工場誘致」やお土産品の羊羹のように何処も同じような「観光開発」などではなく，本当にこのような山村での生活を求めている人があるかどうかが判然とするはずである。そのような人が存在してはじめて村が成立するわけだからである。都市のいわゆる公害問題などとも合せ考える，全体的構想が必要である。

（注）

(1) 島根県頓原町における採集資料「研究資料」1，1971。愛知県富山村における採集資料「研究資料」2，1971。長野県上村における採集資料「研究資料」3，1971。山形県大蔵村沼台地区における採集資料「研究資料」4，1971。

(2) 大牟羅良・菊地武雄：荒廃する農村と医療，「岩波新書」796。

（1971年11月17日）